

たて女

たて女

作・中野浩作

登場人物

○たて女

ユミ (有美)・・・ 無美のたて女。自分に絶対の自信を持っている。

アツコ (温子)・・・ 冷子のたて女。誰に対しても優しく温和に接する。

ミカ (美香)・・・ 醜香のたて女。可愛らしい仕草、容姿の女の子。

○本体

無美・・・ 自分に自身の無い女。基本的に引きこもった精神状態。

冷子・・・ 誰に対しても冷たく、愛想が無い。よって、誰にも好かれない。

醜香・・・ 自堕落、無気力、非常にだらしない。

※それぞれ、以下の形でたて女と本体は紐づいている。

ユミ Ⅱ 無美

アツコ Ⅱ 冷子

ミカ Ⅱ 醜香

OP

唐突に鳴り響く音楽。
奇妙な動きで踊り始める本体達。
それを取り囲むたて女達。
本体を睨んでいるたて女達。

ユミ 「いつも」

アツコ 「いつでも」

ミカ 「いかなる時も」

ユミ 「どんな時も」

アツコ 「どこにいても」

ミカ 「何をしてても」

ユミ 「何をやってても」

アツコ 「やろうとしても」

ミカ 「やったとしても」

ユミ 「返って来る言葉は決まってる」

アツコ 「与えられる態度は決まってる」

ミカ 「刺さる視線は決まってる」

たて女達 「私の名前はたて女」

ユミ 「私はあなたを守ります」

アツコ 「あなたの出来ないことを行います」

ミカ 「あなたのしたいことを行います」

ユミ 「あなたを絶対傷つけません」

アツコ 「あなたの代わりに傷付きます」

ミカ 「あなたは絶対に安全です」

たて女達 「私の名前はたて女。私はあなたを守ります」

不満そうなたて女達。

ユミ 「なんで？」

アツコ 「しょうがない」

ミカ 「頑張ってるのにい」

ユミ 「頑張ってるわよ！！」

アツコ 「しょうがないの」

ミカ 「ボロボロだよお」

ユミ 「やりたくないのに」
アツコ 「それはダメ」
ミカ 「(しぶしぶ) わかってまーす」
ユミ 「(憎らしげに) 逆らえない」
アツコ 「そりゃそうよ」
ミカ 「何でえ？」
ユミ 「逆らえるわけがない」
アツコ 「そうよ」
ミカ 「もーいやー!!」
ユミ 「うるさい！」
アツコ 「怒鳴らないで、冷静に」
ミカ 「冷静って、何？」
ユミ 「この、馬鹿女！」
アツコ 「だから」
ミカ 「(アツコの陰に隠れる) こわーい！」

奇妙な沈黙。

ユミ 「何これ・・・」
アツコ 「しょうがないよ」
ユミ 「何それ」
アツコ 「だってどうしようもないでしょ？」
ユミ 「ねえ、何これ」
アツコ 「・・・」
ユミ 「(苛立って) ねえ」
アツコ 「どうしようもないって言ってるでしょ!？」

ユミ&ミカ、驚く。

アツコ 「(息を整えて)・・・たて女」
ユミ 「嫌」
アツコ 「私の名前はたて女」
ユミ 「あんたはそれで良いの？」

アツコと冷子。

アツコ 「私は冷たい私を守る」
冷子 「冷たい私は暖かい」
アツコ 「にこにこ優しい笑み浮かべ」
冷子 「誰にも愛想を振りまいて」
アツコ 「他人の為に尽くします」
冷子 「私じゃ出来ないあんたがやって」
アツコ 「もちろん私がやりましょう」
冷子 「私に寄り付く男はいない」
アツコ 「ならばせめてもお友達」
冷子 「そんなの要らない男が欲しい」
アツコ 「だったら柔らか笑顔の盾を」
冷子 「そんなの要らない男が欲しい」
アツコ 「だったら気の利く優しさを」
冷子 「そんなの要らない男が欲しい」
アツコ 「だったら――」

ミカと醜香。

ミカ 「せめて、この服着てちょうだい」
醜香 「嫌」
ミカ 「こっちのリボンはいかがでしょうか？」
醜香 「めんどい」
ミカ 「あゝ、このリップ可愛いいゝ」
醜香 「あ、そ」
ミカ 「ピンクにフリルに、フワフワスカート」
醜香 「動きにくい」
ミカ 「ミカ、甘いお菓子が大好きなの！」
醜香 「なんでもいい」
ミカ 「ミカ、可愛いものが大好きなの！」
醜香 「あ、そ」
ミカ 「ミカ、夢見る少女なのお」
醜香 「アラサーだけど」
ミカ 「ミカ、王子様を待っているの！」
醜香 「いるわけないじゃん！」
ミカ 「それでも、ずうっと、待ってるの！」
醜香 「馬鹿でしょ!？」

ミカ 「だから、可愛く綺麗に、待ってるの！」
醜香 「楽に暮らせる方法、探してよ」
ミカ 「だから——」

ユミと無美。

ユミ 「元気出して」

無美 「うん」

ユミ 「大丈夫、私がいるんだから」

無美 「うん」

ユミ 「信用してよ」

無美 「・・・」

ユミ 「ほら、私って、何でも出来るからさ、余計な心配しなくていいから」

無美 「・・・」

ユミ 「疑ってる？ 失礼ねえ。大丈夫だって、あんたはしっかり、この私が守ってあげるからさ」

無美 「嘘」

ユミ 「え？」

無美 「嘘だ、いつも口ばかり。なんにも手に入らない」

ユミ 「ちよっと——」

無美 「私には何にも出来ない！」

ユミ 「そんなことないって」

無美 「じゃあ、なんで？」

ユミ 「何が？」

無美 「なんで私は一人なの!？」

ユミ 「私がいるじゃん」

無美 「あんたなんか要らない! あんたは私が欲しいものじゃない! 私が欲しいものを一回でも、一回でも、手に入れたことある? ないよね? ないよね!？」

ユミ 「それは、これからやってくる大きな宝物を手に入れるための試練——」

無美 「うるさい!! 私を守って! 私を守りなさいよ! あんたは何のために要るのよ!？」

本体達 「私を守れ! たて女!」

本体たち、たて女たちを鋭く指差す。

合コン。

猥雑な音楽。

嬌声、騒ぎ声。

三人対三人の合コンであるが、舞台上にはたて女たちのみ。

ユミ 「かんばーい!!」

アツコ 「ちょっと、それ何回目？」

ユミ 「(いい感じに酔っ払って) いいのよ、乾杯は何度やっても気持ちがいい!!」

ミカ 「(ぶりっ子して) ええ、そうですかあ？」

ユミ 「(イラッとする) ええ、そうよ」

ミカ 「おっきい声でえ、かんばーい! おじさんみたあい。(隣に座っている男に) ねえ? キョウ君もそう思うでしょう?」

アツコ 「まあ、確かに最初の一回ぐらいでいいかもね」

ミカ 「そうですよねえ? 一回目の乾杯は始まりますよお、って感じがしますけどお、何回もやったらあ——」

ユミ 「(イラだつて) ああ、そうですかあ。じゃあ、この後、何杯来ても乾杯はご遠慮させていただきます」

ミカ 「そうしてくださいさあい」

ユミとミカ、陰悪な雰囲気。

アツコ 「(二人に、気を使って) まあまあ、そんなところで、ね？」

しかし、睨み合ってる二人。

というより、ユミが一方的に敵対視している。

ミカ 「そうだあ、皆さんの好きなタイプってどんな感じなんですかあ？」

アツコ 「(ユミを気にしつつ) あ、それ私も聞きたいなあ」

ミカ 「キョウ君はあ? ミカは、キョウ君のこと、好きだよお？」

ユミ 「ちょっと、それ、失礼じゃない？」

アツコ 「ユミ」

ミカ 「ええ? 何ですかあ? ミカは、好きな人に好きですよって言うだけなのにい」

ユミ 「あんたの告るのが目的なら、みんなに聞く必要ないでしょ? 終わってから好

きなようにすりゃあいいじゃない」

ミカ 「なんで、ユミさんに気を使わなきゃいけないんですかあ？ （アツコに）ダメ？
アツコさん、ミカ、ダメな子ですかあ？」

アツコ 「（多少困惑して）ううん、ミカちゃんの良い子だと思うよ」

ユミ 「アツコー！」

アツコ 「（ユミを制しつつ）でもね、ミカちゃんが話題を提供して、タク君もキミヒロ君も答えようとしてたのに、ミカちゃんがキョウ君に好きだって言っちゃったら、もし、仮に、タク君とキミヒロ君がミカちゃんに気に入られたいって思ってる気持ちちが可哀想だと思うの。わかる？」

ミカ 「アツコさあん」

アツコ 「なあに？」

ミカ 「タクちゃんとキミ君のどっちかが好きなのお？」

アツコ 「（びっくりして）どうしてそうなるの！？」

ミカ 「だって、ミカが好きキョウ君よりも、タクちゃんとキミ君の方が気になるんでしょう？ あ、それとも、キョウ君が好きな隠そうしてるの？ かわいいー」

アツコ 「ちょ、そ、そんな——」

ミカ 「ああ、（キョウ君に）これ、アレだよねえ、凶星って言うんだよねえ？ おもしろい。ミカ、鋭いでしょお？」

ユミ 「アツコ」

ユミ、アツコを引っ張って席を立つ。

ユミ 「（ミカに敵対心を剥き出しにして）トイレ、行ってきます」

ミカ 「（キョウ君に向きながら）そんな言わなくてもいいですよお」

ユミ 「（イライラ）」

ユミとアツコ、トイレに。

舞台の中央、オブジェの中にいる、それぞれの本体の元に。

本体、化粧を始める。

本体に向かって、二人、会話を進める。

ユミ 「あいつなんなの！？」

アツコ 「まあまあ」

ユミ 「まあまあ！？」

アツコ 「ごめんなさい」

ユミ 「あんたの連れでしょ!？」

アツコ 「違うよ。職場の知り合い」

ユミ 「それでも、あんたが連れてきたんじゃない。何とかしなさいよ」

アツコ 「私が？」

ユミ 「そうよ。何よあれ、(マネをして) ええ、違いますよお」

アツコ 「似てる似てる」

ユミ 「アツコ!」

アツコ 「ごめんなさい」

ユミ 「ホント、マジ勘弁して欲しいわ」

アツコ 「男の子達もちょっと引いてるしねえ」

ユミ 「(怒りを抑えつつ) なのに、」

アツコ 「あ、気付いた？」

ユミ 「気付いてるわよ」

アツコ 「本命だもんねえ」

ユミ 「合コン誘って、来るって言ったから、よっしゃ! って思ったのに、誤算も誤算よ、大誤算!」

アツコ 「(同意して) そうだねえ」

ユミ 「そうだねえ!？」

アツコ 「ごめんなさい」

ユミ 「デレデレしやがって」

アツコ 「ああいう子が好きだったんだねえ」

ユミ 「何がいいのよ、あんなやつ」

アツコ 「自分に気があるって思うだけで男の子は嬉しいみたいよ」

ユミ 「あんな、頭悪そうなやつ、っていうか、絶対頭悪いわよあいつ!」

アツコ 「それはどうかなあ」

ユミ 「何？」

アツコ 「ああいう子って、意外と全部計算だったりするよ」

ユミ 「マジ？」

アツコ 「マジ。だって、あの子仕事の際は全然違う感じだもん」

ユミ 「計算かぁ。．．．いやいや、だとしても、ムカつくでしょ。だってあいつ私に敵意むき出しだよ!？」

アツコ 「それはお互い様」

ユミ 「先に喧嘩売ってきたのはあいつでしょ」

アツコ 「でも、乾杯五回も六回もやるのはちよつと．．．」

ユミ 「なんで? いいじゃない。乾杯。好きなんだもん。しょうがないでしょ? え? 何? 私が悪いの? あの頭の悪そうで、あ、こいつ俺のこと好きそうだし、

っていうか、好きだって言ってるし、こっちからちょっと押してみたらすぐに落ちるんじゃない？ ていうか、このあとお持ち帰りできるんじゃない？ あ、しまった、明日仕事入れちゃってるよ、遅刻の連絡今からしておこうかなあ。でも、この時間じゃ会社誰もいないしなあ、まいったか明日の朝で。部屋汚いけど別にいいよな、酔っ払ってるし、こっちが早く起きて適当に片付けておけば大丈夫っしょ。的なことを男に思わせる雰囲気バリバリで出しまくってる女よりも、私が悪いって言うの！？」

アツコ 「そこまで言っていないし、何その妄想」

ユミ 「男なんて大体そんなもんでしょ！？」

アツコ 「でも、そうじゃないって思いたいんでしょ？」

ユミ 「キョウ君は——」

と、何か言おうとするが何も言えず、口をバクバクと動かすユミ。

アツコ 「まあ、がんばろ」

ユミ 「(どこか恥ずかしげ) 言われなくても頑張るわよ」

アツコ 「大丈夫。二人きりにさせなきゃいいから」

ユミ 「そうね。フォローは頼むわ」

アツコ 「任せておいて」

二人、トイレから出る。

本体、化粧を止める。

ユミ&アツコ 「え！？ 帰ったの！？」

アツコの会社内。

静かだが落ち着かないオフィスの雰囲気。

パソコンを操作している醜香。

アツコ、ミカに話しかける。

ミカ、にこにここと笑っている。

アツコ 「おはようございます」

醜香 「・・・」

アツコ 「・・・おはよ」

醜香 「(アツコをちらりと見る)・・・」

アツコ 「(すしおどけて) お、おはよ」

醜香 「・・・(小さな声で) ございます」

アツコ 「(聞こえなかった) え? え?」

醜香 「(作業に戻る)・・・」

アツコ 「(気まずい) んんん・・・」

醜香 「昨日」

アツコ 「え?」

醜香 「昨日」

アツコ 「あ、昨日! 昨日ね、お疲れ様でしたあ」

醜香 「何も」

アツコ 「疲れてない? そうだよねえ。お酒飲んでご飯食べただけでもんねえ」

醜香 「いえ」

アツコ 「(にこにこして) 来てくれてありがとうございます。よかったよお。人数揃わないかと思ってたからさあ」

醜香 「お友達」

アツコ 「え? ああ、そうそう。あの子にね、どうしても、って頼まれちゃってさあ。結構仲良いからさ、断りきれなくて」

醜香 「そうじゃなくて」

アツコ 「え?」

醜香 「(アツコをじっと見つめる)・・・」

アツコ 「(苦笑い&愛想笑い) え? 何?」

醜香 「それだけですか?」

アツコ 「あ、だからね。また今度、よかったら、一緒に遊んだり——」

醜香 「しませんよ」

アツコ 「あ、・・・そう」

醜香 「遊びたいんですか？」

アツコ 「そりゃあ、そうよ。わた——」

醜香 「(わた) しは、遊びたくないです。合コンなら、行きますけど」

アツコ 「あ、・・・そう」

醜香 「・・・」

アツコ 「(何かを聞こうとして、聞けない)・・・」

醜香 「・・・何にも」

アツコ 「(明るく) え？」

醜香 「・・・何にも無かったです」

アツコ 「え？ 何にも」

醜香 「無かったです」

アツコ 「そっかあ、何にも無かったんだあ」

醜香 「卑怯ですよね？」

アツコ 「え？ 誰が？」

醜香 「お友達」

アツコ 「(焦って) いや、いやいや、そんなことないよ。あの子、気は強いけど——」

醜香 「なんで？」

アツコ 「なんでって？ 何が？」

醜香 「なんで庇うんですか？」

アツコ 「そりゃあ——」

ミカ 「(突然) お友達だからですかあ？」

アツコ & 冷子

冷子に責められているアツコ。

冷子 「(イライラして) 何で？」

アツコ 「何が？」

冷子 「なんで私なの？」

アツコ 「友達でしょ？」

冷子 「いいように使われてるだけじゃない」

アツコ 「そんなことない！ 私は、ユミのことを思って——」

冷子 「男」

アツコ 「え？」

冷子 「私の男は？」

アツコ 「・・・ごめんなさい」

冷子 「男欲しいの、私」

アツコ 「うん。知ってる」

冷子 「じゃあ、頑張ってよ。上手くいく方法でさ」

アツコ 「笑って」 うん。頑張る」

冷子 「(アツコを眺めて)・・・」

アツコ 「何？」

冷子 「ううん」

アツコ 「(愛想笑い) 何？」

冷子 「別に」

アツコ 「(愛想笑い)」

冷子 「あのさあ」

アツコ 「(にこやかに) 何？」

冷子 「(アツコの笑顔を指差して) それ」

アツコ 「(笑顔のまま、固まる)」

冷子 「止めて」

醜香、携帯を取り出す。しかし、話をしているのはミカである。

ミカ 「もしもし。あ、キョウ君？ キョウ君だあ。うふふ。そう、仕事中だよお。

昨日はごめんねえ、途中で帰っちゃってえ。え？ (強く) ううん、そんなこ

とないよお。昨日は、とっても大事な用事があったの。ホントだよ。うん。ホ

ント。信じてくれないのお？ 大丈夫だよお。ミカはあ、キョウ君のこと・・・。

ふふふ。だ・か・ら、信じてくれないきや、嫌なお。ね？・・・うふふ。ア

リガト。じゃあ、また今度ね。うん。うん。バイバイ」

電話でやり取りするアツコとユミ。
が、電話を握っているのは無美と冷子である。
冷子とアツコ、見つめ合っている。
冷子、鋭い視線。

アツコ 「・・・うん」
ユミ 「うん？」
アツコ 「あ、うん」
ユミ 「アツコ？」
アツコ 「(はっとして) うん。大丈夫みたい」
ユミ 「大丈夫？」
アツコ 「何にもなかったって」
ユミ 「ホントに？」
アツコ 「まあ、本人が言うには」
ユミ 「あいつなあ・・・」
アツコ 「びっくりしたよ」
ユミ 「何が？」
アツコ 「会社で喋ったんだけど、いつもの感じだったから」
ユミ 「いつものって？」
アツコ 「ボソボソ」
ユミ 「(氣に入らない様子で) やっぱり全部計算なんだ」
アツコ 「そうだろうねえ」
ユミ 「てことは、次の手段を考えてるかもしれないわね」
アツコ 「まあ、そうかも」
ユミ 「アツコ」
アツコ 「なに？」
ユミ 「先手を打つわよ」
アツコ 「先手？」
ユミ 「わかってんでしょ？」
アツコ 「(わかってているがごまかして)・・・いやあ？」
ユミ 「(不満げ) 察してよ」
アツコ 「だから、何を？」
ユミ 「うまいことやってよ」
アツコ 「だから、何を？」

ユミ 「だから、昨日みたいに」

アツコ 「合コン？」

ユミ 「違う！（急にナヨツとして）できたらあ、一対一でえ」

アツコ 「・・・（苦笑を浮かべて）それ、私がセッティングするの？」

ユミ 「あったり前でしょ」

アツコ 「それ、私、得しない・・・」

ユミ 「ええ、何それえ、ちょっと待ってよお、違うでしょ。そういう話じゃないじゃん。違うじゃん。だって、協力してくれるって言ったのアツコでしょ？ じゃあ、文句言っちゃダメでしょ」

アツコと冷子、視線を交わす。

アツコを睨みつけている冷子。

ユミ 「あ、アツコも彼氏欲しいんだっけ？ わかったわかった。今度は私が手伝って

あげるから、今回は、我慢して。ね？」

アツコ 「・・・うん。わかった」

ユミ 「ありがと。助かる」

アツコ 「うん。じゃあ、キョウ君には連絡——」

突然、冷子が立ち上がる。

はっとするアツコ。

ユミ 「頼むわ。今度こそ絶対手に入れてやる！」

冷子 「ていうかさ」

ユミ 「え？」

冷子 「教えるよ。アドレス」

ユミ 「うえ？ え？ ちょ、ちょっと待ってよ、そういうのはダメでしょ」

冷子 「なんで？」

ユミ 「（動揺して）なんでって、だって、それはちょっと、順番が違うし・・・。キモがられたりしたら・・・距離が離れちゃうって言うか・・・」

冷子 「距離？」

ユミ 「うん、距離」

冷子 「知り合ってから一月も経ってないじゃん」

ユミ 「そうだけど、そうだけだし、あの時、ひょっとしたら、私のこと、よく思ってたかもしれないじゃない。だとしたら、だとしたらよ、だとしたら・・・」

冷子、呆れた様子で、ユミを見る。

ユミ 「(奇妙な沈黙に) 何？」

冷子 「(冷たく) いや」

ユミ 「何？ あ、また余計なこと考えてる？」

冷子 「(イラツとして) は？」

ユミ 「いいから、そういうの。大丈夫だから。必要な情報は手に入ったし、後はひとりで大丈夫だから」

冷子 「それ、私が話したこと言ってる？」

ユミ 「そりゃ、感謝はしてるよ。でも、頼んでないもん」

冷子 「あ、そう」

冷子、アツコと視線を交わす。

アツコ、冷子に向かって制止のアクション。

ユミ 「私一人でも全然余裕よ。だから、アツコは余計なことしない。わかった？」

冷子 「・・・」

ユミ 「アツコ？」

冷子 「・・・」

ユミ 「おい。アツコさーん？」

冷子 「聞いてるよ」

ユミ 「うん。じゃあ、また、お楽しみにい」

冷子 「何を？」

ユミ 「え？」

冷子 「何を楽しみに待つのか？」

ユミ 「そりゃあ、私とキョウ君の——」

冷子 「馬鹿でしょ？」

ユミ 「・・・何？」

冷子 「あんたさ、ほんと馬鹿だよ」

ユミ 「アツコ？」

「人の苦勞も知らないで、馬鹿にしないでしょ？ ねえ？ 馬鹿にしてくだよね？
ねえ、私も男欲しいの。協力してよ・・・あ、無理か。だって馬鹿だもんね。
自分には自信あるみたいだけど、それだけで何にもしないんだから。ほんと馬
鹿みたい。あ、キョウ君の連絡先送っておいてあげる。ほら、私達、お友達だ
から。適当に頑張って」

電話を切る冷子。

何事か言いたげなアツコ。

冷子 「あんたさあ」

アツコ 「うん」

冷子 「ねえ、あんたはさ」

アツコ 「うん。なあに？」

冷子 「何のためにいるの？」

アツコ 「そりゃあ——」

冷子 「違うでしょ」

アツコ 「違うじゃないよ。ちゃんとわかってる。あなたの為にユミと——」

冷子 「違うでしょ」

アツコ 「違うじゃない。だって——」

冷子 「男は!？」

アツコ 「そんなこと——」

冷子、アツコに詰め寄る。

冷子 「そんなこと? じゃあ、どんなこと？」

アツコ 「彼氏は、いつだって出来るじゃない」

冷子 「出来ないわよ。出来ないからあんたがいるんでしょ？」

アツコ 「もっと大事なことがあるでしょ？」

冷子 「ない」

アツコ 「あるよ」

冷子 「じゃあ、早く見つけてきてよ」

アツコ 「わかった。わかってる。もうちょっと待ってて」

冷子 「嫌。待たない」

アツコ 「待ってて」

冷子 「待たない。へらへら笑ってたってしょうがない」

アツコ 「だってそれは——」

冷子 「(アツコを睨みつけ) 役立たず」

電話の不通音。
 びっくりしているユミ。
 無美、携帯を閉じる。

ユミ 「アツコ？」

無美 「ねえ」

ユミ 「今の、アツコ？」

無美 「うん」

ユミ 「え？ 何今の？」

無美 「・・・うん」

ユミ 「・・・何よ、今の」

無美 「うん」

ユミ 「(いきなり激怒) はあっ！？ 何今の！？ 馬鹿って言われた？ 馬鹿って言われた？ 私！？」

無美 「言われた」

ユミ 「馬鹿？ 馬鹿って、何！？ 何それ！？ ・・・はあ！？ 馬鹿・・・馬鹿って何！？」

無美 「ねえ」

ユミ 「(電話に向かって) 馬鹿って何！？ おーい！？ 馬鹿って何ですかあ！？ はあ？ ふざけんじゃないわよ！？ ・・・マジありえない。マジありえないんですけど！？」

無美 「ねえ」

ユミ 「(怒りが収まらない) むあああああ！！！！ ムカつく！？ ムカつく？ うん、ムカつく。(エアーで誰かに話しかける) え？ ムカつくよね？ ムカつきますよね？ 誰だって、馬鹿っていわれたらムカつきますよね？ ああああああ！！！！ 私に向かって、馬鹿とか！？ マジありえないんですけど！！！！」

無美 「ねえ！」

ユミ 「(制止する)」

見つめ合う、ユミと無美。

ユミ 「(息が上がっている)・・・何？」

無美 「止めて」

ユミ 「何を？」

無美 「頼るの」

ユミ 「は？」

無美 「頼るの止めて」

ユミ 「誰に？ （ふと携帯を見つめて）・・・アツコ？」

無美 「うん」

ユミ 「はあ？ 何言ってるの？ いいじゃない。だって、ああいう子だよ？ 人のために尽くしてなんぼの子だよ？」

無美 「じゃあ、今のは？」

ユミ 「（何か言おうとするが言葉が出てこない）・・・」

無美 「怒ってたけど」

ユミ 「うん」

無美 「怒らしちゃったみたいなんだけど」

ユミ 「うん」

無美 「ねえ、アツー」

ユミ 「じゃあ、あんたがやりなさいよ！」

無美 「・・・何それ」

ユミ 「・・・」

無美 「違うよね？ それ。それ違うじゃん。それ、私の役目じゃないでしょ。あんたの役目でしょ。ねえ、違う？」

ユミ 「・・・ごめん」

無美 「どうすんの？」

ユミ 「・・・」

無美 「どうすんのって聞いてんの」

ユミ 「どうにかする」

無美 「どうやって？」

ユミ 「・・・」

無美 「どうやってって聞いてんの」

ユミを睨みつけている無美。

ユミ、その視線を避けている。

と、携帯の着信。メールのようだ。

無美、メールを確認する。キョウ君の連絡先。

無美 「（メールを読む）あとは一人で頑張っ。まあ、無理だろうけど（笑）」

ユミ 「（はっとする）」

無美 「・・・」

ユミ 「・・・」

無美 「・・・」

ユミ 「・・・」

無美 「やっぱダメだ」

ユミ 「違う」

無美 「やっぱ、ダメだ・・・」

ユミ 「そんなことない」

無美 「ダメなんだよ、やっぱり。私なんか――」

ユミ 「（勢いよく）大丈夫！！」

無美 「（すこし驚く）」

ユミ 「大丈夫よ！（言い文句が思いつかない）ほら・・・えっと・・・」

無美 「・・・」

ユミ 「（何か閃いたように）・・・私！」

無美 「・・・」

ユミ 「あんたの傍にいるのは、誰？ この私！ この私だよ？ この私があんたの傍

にいて、あんたがダメになるわけじゃないじゃん。任せないさって、彼氏の一人や二人、バシッと作ってやるわよ。男だって、ガンガン寄って来て、もうどうしようもない！ って感じの？ 私に任せておけば、大丈夫って言うか？ そう！ 大丈夫！ だから、私を信用しなさいって。ね？ ほら、ほらほら、元気出た？ 出たでしょ？ やったね。ほら、私のおつかげ！！（ガッツポーズ的な） ね？ 大丈夫でしょ？ 安心したでしょ？ 私がいれば、だいじよーぶ！！！！」

ユミ、物凄くいい笑顔を無美に向ける。

無美、それを呆れた様子で見る。

ユミ 「（視線に対して）・・・何？」

無美 「別に」

ユミ 「何？ 言ってよ」

無美 「なんでもない」

ユミ 「（かっこつけて）私と、あんたの仲だろ？」

無美 「・・・」

ユミ 「（無美にぐぐつと寄る）」

無美 「・・・すごいね」

ユミ 「何が？」

無美 「すごいね」

ユミ 「(少し照れて) そんなことないわよ」

無美 「あんたはすごいよ」

ユミ 「そんなことない。私はあんたがいなきゃ——」

無美 「何で？」

ユミ 「え？」

無美 「何で私はあんたになれないの？」

ユミ 「(困った顔)」

無美 「ねえ、なんで？ なんで私はあんたじゃないの？」

ユミ 「大丈夫よ」

無美 「うるさい。何が大丈夫なの？ 何が？ ねえ、何が？」

ユミ 「大丈夫」

無美 「うるさい」

ユミ 「何にも心配いらなくて。私がいるんだから、大丈夫——」

無美 「だから何が大丈夫なのよ！？」

突然、ピシリと、ひび割れの音。

その音に驚く無美。ユミは音の正体は何なのか知っているのか動じない。

一瞬の静寂。

無美 「何？」

ユミ 「(妙に落ち着いて) なんでもないよ」

無美 「何の音？」

ユミ 「なんにも」

無美 「嘘。それは嘘だ」

ユミ 「嘘じゃない」

無美 「いつも嘘ばかり。いつも口ばかり」

ユミ 「それは——」

無美 「私のためなんでしょ？ 全部知ってるよ」

ユミ 「いいの」

無美 「何を？」

ユミ 「あんたが気にしてることは全部気にしなくてもいいの。それは——」

無美 「うるさい！！！！」

再度、ひび割れの音。

先ほどよりも大きい。

ユミ、周囲を気にする。

無美 「何を気にするの？」

ユミ 「(あんたの) 気にすること」

無美 「(なんで私は) 気にしちゃいけないの？」

ユミ 「(優しく) 私がいるから。ね？ もう、止めよう。私がいる。私があんたを守ってあげる。私があんたを守ってあげるから、あんたはそのままでもいいんだよ」

無美 「嫌。私はあんたになりたいの」

ユミ 「いいの。そのままでもいいの。全部うまいことやってあげる。ね？」

無美 「・・・」

ユミ 「・・・」

無美 「喉から」

ユミ 「え？」

無美 「喉から手が出るほど」

ユミ 「・・・」

無美 「喉から手が出るほど私はあんたが欲しいの」

ユミ 「・・・」

無美 「喉から手が出るほど私はあんたが欲しいのに、あんたはそのままで良いと言うのは何故？」

ユミ 「それは・・・」

無美 「嫌い」

ユミ 「・・・」

無美 「あんたが嫌い」

ユミ 「・・・」

無美 「あんたになりたい私が嫌い」

ユミ 「・・・」

無美 「あんたになりたい私が嫌いなあんたが嫌い」

ユミ 「大丈夫だよ」

無美 「・・・すごいね」

ユミ 「そうよ。私はすごいの」

無美 「私にできないことをするんだ」

ユミ 「そう。あんたにできないことをしてあげる」

無美 「そうやって、また、一人にさせるんだ」

ユミ 「違う」

無美 「違うない」

ユミ 「違うよ。一人にはさせない」

無美 「アツコは？」

ユミ 「なんとかするよ」

無美 「キヨウ君は？」

ユミ 「なんとかするよ」

無美 「どうやって？」

ユミ 「任せておいてよ」

無美 「・・・要らない。あんたなんか」

ユミ 「ちょっと」

無美 「怒らせちゃった。またダメだ」

ユミ 「大丈夫」

無美 「また怒らせちゃった。何人目？ 何人目なの？ あんたに任せてもいいことな
んかない」

ユミ 「・・・」

無美 「あんたなんか要らない。誰も私なんか見ちゃくれない」

ユミ 「私は――」

無美 「あんたが嫌いな私は、どうやったらあんたになれるんだと思う？」

ユミ 「必要ない」

無美 「その必要？」

ユミ 「そう。その必要はない」

無美 「なんで？ あんたがいるから？」

ユミ 「そう。私がいるから」

無美 「うるさい！！！」

破裂するようなひび割れの音。

周囲の空間へ、焦るユミ。

無美 「うるさいうるさい！ あんたなんか要らない。あんたなんか！！ 私は一
人になんたらないの！ ねえ、わかってるんでしょ！？ あんたは私を一人にさせ

たいんだ、そうなんだ。そうに決まってる！ なんで？ なんで！？ 私を守
りなさいよ！？ 守りなさいよ！？ それがあんたの役目でしょ！？ なんで、
私はまだ一人なの！？ なんで友達がいらないの？ なんで彼氏がいらないの？

いつもいつもいつもいつも、なんでそうやって誰かに迷惑をかけるの！？ も
っと別のやり方考えてよ！？ ねえ、ねえねえねえ！！ いつも私は見てるだ
けで、なんにもさせてくれないの！！ 私ならもつとうまくやるのに！ うま
く出来るのに！ あ、そうしたらあんたなんか要らないね。あんたなんか要ら
なくなるんだ！ そうだ、それでいいじゃん。私があんたの代わりに友達作っ
て、合コン行って、彼氏作ればいいんだ！ そうじゃん。簡単じゃん。そうし

たら私はあんたになれるじゃん！　そうだ、そうしよう。そうすればいいんだ。
そうすれば私は――」

ユミ、無美に平手打ち。
驚く無美。

無美 「・・・」
ユミ 「・・・」

うつむいている無美。

ユミ 「落ち着いた？」
無美 「・・・うん」
ユミ 「出来ないでしょ？」
無美 「・・・うん」
ユミ 「あんたのためにいるんだ」
無美 「うん」
ユミ 「心配しないで」
無美 「・・・」
ユミ 「大丈夫。私がいるから」
無美 「・・・いつも、ありがとう」
ユミ 「（照れて）ちょっと、止めてよ」
無美 「あんたのおかげだね」
ユミ 「まあ、これからだけど」
無美 「うん」
ユミ 「なんとかしてみせるから、安心してよ」
無美 「あんたのおかげだ」
ユミ 「だから止めてって」
無美 「たて女」
ユミ 「うん？」
無美 「あんたの名前はたて女」
ユミ 「そうよ。私あんたを守ってあげるんだ」
無美 「じゃあ、当たり前だね」
ユミ 「何が？」
無美 「ていうか、ダメじゃん」
ユミ 「だから何が？」

無美、ユミに平手打ち。

無美 「いつもいつもダメでしょ。あんたは私を守らないと、ダメでしょ」

ユミ 「・・・」

無美 「すごいね。あんたは私にできないことができるんだ」

ユミ 「（無理に笑顔で）そうよ。だから、任せなさいよ」

無美 「任せるよ。任せる」

ユミ 「うん。大丈夫。この私に任せておけば、だいじょーぶ！！！」

無美 「ねえ」

ユミ 「うん？」

無美 「それ」

ユミ 「何？」

無美 「止めて」

携帯の着信音

携帯の着信音

ゴロゴロしている醜香。

ミカ、醜香を起こして携帯に出させようとする。

が、醜香、それをうっとおしそうに振り払う。

そのような動作を二、三度繰り返し、醜香、しぶしぶ携帯を手にする。

ミカ、嬉しそうにニコニコと様子を見ている。

醜香、携帯を取る。が、着信相手を確認して、無造作に出る。

答えるのはミカである。

ミカ

「はあい！ もしもし、ミカちゃんのけいたいでんわですよ。お待たせしました。あ、その声はあ・・・キョウ君だあ。えへへ。どうしたのお、こんな時間にい。え？ ううん。そんなことないよお。ミカはあ、キョウ君のためならあ、いつでもフリータ・・・うん。今からあ？ えへ、どうしようかなあ？ こんな時間にひとりで外に出るのは危ないしい、でもでも、ミカだってえ、キョウ君には会いたいんだよお。でもお・・・（いくらか驚いた様子）え？ 今？ 下に？ いるのお・・・？」

ミカ、どこか危機感を感じている様子。

ミカ、適当に受け答えをしながら、醜香の服を引っ張る。

醜香、それを振り払う。

何度か同じ動作を繰り返す。

ミカ

「醜香を引っ張りながら）うん。うん・・・ダメじゃないよお。そんなことないよお。でもでも、今日はあ、ちよつと、あれっというかあ、ミカ、ひとりでゆっくり過ごしたい夜もあるって言うかあ。ミカにだって、そういう日だってあるんだよお。（自分で言ったことに自分で納得する）そうそう、そういう日だってあるんだよお？ 物思いに耽って、ひとりで過ごす日だってミカちゃんには必要なんです。ね？ だ・か・ら、今日はあ、ねえ？ ううん、そんなことないよお。キョウ君のこと、大好きだよお。だけど、今日は、ごめんねえ」

ミカ、物凄い醜香の服を引っ張る。

醜香、しぶしぶ、といった様子で立ち上がる。

醜香

「（ぶっきらぼうに）キョウ君のこと、大好きだよ。だけど、今日はごめんね」

無造作に携帯を切る醜香。

ミカ 「またあ？」

醜香 「(じっとミカを見つめる)」

ミカ 「ねえ」

醜香 「(おもむろに)・・・文句？」

ミカ 「・・・」

醜香 「・・・何、それ？」

ミカ 「・・・」

醜香 「・・・何とか」

ミカ 「・・・」

醜香 「何とかしてよ」

ミカ 「・・・」

醜香 「連れ込まないで、何とかしてよ」

ミカ 「・・・だってえ」

醜香 「何それ」

ミカ 「だって——」

醜香、ミカに向かって舞台上の衣装を投げつける。
ミカ、驚く。

醜香 「可愛くすれば？」

醜香、化粧品を投げつける。

醜香 「ねえ？ 可愛くすれば？」

醜香 「・・・」

ミカ 「・・・」

醜香 「・・・いつもいつも、なんで？」

ミカ 「だって、一緒に——」

醜香 「嫌。ここ、私の場所。私の場所だよね？」

ミカ 「私だって——」

醜香、適当なお菓子を投げつける。

醜香 「違う。この部屋は、私の場所。あんたの場所じゃない。そんなこともわかんないの？ バカ女」

醜香、靴を投げつける。

醜香 「（ミカを見下して）外で。外で。その為にいるんですよ？ あんた」

ミカ 「でもお・・・」

醜香 「ねえ」

ミカ 「え？」

醜香 「役立たず」

軽快な音楽。

とても晴れやかな笑顔で踊り始めるたて女たち。

本体たち、化粧に熱が入る。

本体たち、ぶつぶつ何事かを呟きながら化粧をしている。

冷子 「役立たず」

無美 「役立たず」

醜香 「役立たず」

冷子 「本当に役に立たない」

無美 「あんたなんか要らない」

醜香 「そんなこともわかんないの？ バカ女？」

冷子 「へらへらしたってしょうがない」

無美 「いつも口ばかり」

醜香 「外でやれって言うてんの」

冷子 「役立たず」

無美 「役立たず」

醜香 「役立たず」

本体たち、少しずつ声が大きくなっていく。

冷子 「もう待ってらんない」

無美 「誰も私を見ちゃくれない」

醜香 「あゝ、お腹空いたあ」

冷子 「もう任せてらんない」

無美 「ずっとひとりなんだ」

醜香 「洗濯明日でいいかあ」

(エンドレス)

冷子 (同時) 「もう待ってられない!!」

無美 (同時) 「誰にも好きになってももらえない!!」

醜香 (同時) 「ああああああ、眠い!!!!」

本体たち勢いよく立ち上がる。

ユミ&ミカ 「じゃあ、行ってきます!」

ユミ&ミカ、どこかに出かける仕草。
冷子も行こうとする。

アツコ 「待って！」

冷子 「待ってられない」

無美 「待ってよ。おいてかないで」

ユミ 「大丈夫帰ってくるから、一人じゃないでしょ？」

醜香 「一人で帰ってきてよ」

ミカ 「でもお・・・」

冷子 「あんたじゃ間に合わない。先をこされて何にも手に入らない」

ユミ 「ちゃんとゲットしてきてあげるから、心配しないで」

アツコ 「だけどー」

醜香 「また文句？ 最近多いね、それ」

ミカ 「そんなことないよ。あのね」

無美 「また言い訳するんだ。いつもみたいに適当なこと言って、絶対うまくいきっこないのに、それでも言い訳するんだ」

アツコ 「言い訳じゃなくて」

冷子 「説教？」

醜香 「あんたが偉そうに私に向かって説教するの？」

ユミ 「違う違う、私はあんたのために」

冷子 「じゃあ、私に男譲ってよ」

アツコ 「そんなんじゃ、誰も」

無美 「それは嫌」

ミカ 「じゃあ、綺麗にしてよお」

醜香 「それも嫌」

ユミ 「（会話の流れを断ち切るように）とにかく、行ってくるよ」

出かけようとするユミ&ミカ。

冷子とアツコ、見つめあっている。

突然、無美。

無美 「たて女は！！！」

ハッとするたて女たち。

無美 「たて女は！！！！」

たて女達 「たて女は、あなたの為に全力を尽くし、あなたの望みを叶えます！」

冷子 「たて女は！！！！」

たて女達 「たて女は、あなたを取り巻く全ての苦痛、困難からあなたを守ります！」

醜香 「たて女は！！！！」

たて女達 「たて女は！！！！ あなたが出来ないこと全てを行います！」

本体達 「たて女は！」

たて女達 「たて女は！」

本体達 「すべからく、私の存在を！」

たて女達 「すべからく、あなたの存在を！」

本体達 「絶対！」

たて女達 「保守！」

本体達 「絶対！」

たて女達 「保護！」

本体達 「必須項目！」

たて女達 「必須項目！」

本体達 「私を傷つけるな！」

たて女達 「あなたを傷つけません！」

本体達 「私を守れ！」

たて女達 「あなたを守ります！」

本体達 「私の為に傷付きなさい！」

たて女達 「(困惑、抵抗の表情)・・・」

本体達 「私の為に傷付きなさい！」

たて女達 「・・・」

本体達 「私の為に傷付きなさい！」

たて女達 「・・・」

本体達 「私を守れ！！！」

息を荒げている本体達。

たて女達、本体を見つめている。

見つめ合う、たて女と本体。

と、

ユミ 「(ぼそりと) やってらんない」

ビシッと、どこからひび割れの音。

ユミ、舞台中央に。

誰かと待ち合わせている様子。

どこかに電話をしている冷子。

どうやら相手は男のようだが、なぜか不機嫌な様子。

冷子 「そう・・・そう・・・。だから、何回言わせるの！？　ねえ、人の話ちゃんと聞いてた？　もう一回言ってあげようか？　何回でも言ってあげるよ？　でもさ、こういう話って、ふつう女からする話じゃないよね？　あんたがもたもたしてるから、こっちからこういう話をしてあげてるんでしょ？　違う？　ねえ、私間違ってる？　・・・は？　何それ。どういうこと？　だから、なんでそういう話になるのよ！　だから、馬鹿じゃないの！？　いい加減にしてよ。いい加減にして。もういい。もういいわよ・・・は？　（異様にはつきりと聞き返す）俺のこと好きなんじゃないの？　・・・はあ？　頭悪っ！　なんでそうなるの？　え？　頭悪いわねあんた。なんでそうなるのよ、言ってみなさいよ。言いなさいよ。ほら、待っててあげるから」

相手の返事を待つ冷子。

奇妙な沈黙。

沈黙、長く続く。

長く続く。

冷子 「・・・」

アツコ 「（心配そう）」

冷子 「・・・」

冷子、携帯を耳から離し、見つめる。

冷子 「・・・チッ」

アツコ 「あのね」

冷子 「うるさい」

冷子、次の番号にダイヤル。

アツコを睨み付けている冷子。

冷子 「あ、もしもし？ タク？ あのさ、あんた私と付き合いなさい。……何、そのリアクション。馬鹿にしてんの？ ……もう一回？ あんた私と付き合いなさい。これでいい？ 満足した？ じゃあ、——…何？ はあ？ なにそれ。そう…そう…。だから、何回言わせるの！？ ねえ、人の話ちゃんと聞いてた？ もう一回言ってあげようか？ 何回でも言ってあげるよ？ でもさ、こういう話って、ふつう女からする話じゃないよね？ あんたがもたもたしてるから、こっちからこういう話をしてあげてるんでしょ？ 違う？ ねえ、私間違ってる？ ……は？ 何それ。どういこと？ だから、なんでそういう話になるの！ あんたのことなんか、これっぽっちも好きじゃないわよ！！」

冷子、電話を切る。

冷子 「……」
アツコ 「……」
冷子 「……何」
アツコ 「代わろうか？」
冷子 「なんで？」
アツコ 「いや、その……」
冷子 「何？ あんたまで、馬鹿にするの？」
アツコ 「(慌てて) そんなことないよ。けど、ね、そのやり——」
冷子 「じゃあ、あんたみたいにやればいいの？」
アツコ 「そうは言っていないけど」
冷子 「ねえ、教えてよ。うまくいく方法を教えなさいよ。あんた、知ってるんでしょ？ 違う？」
アツコ 「ごめんなさい」
冷子 「謝ってんじゃねえよ！！！」
アツコ 「……」
冷子 「……そっか。そういう風にやればいいんだ。そういう風にやれば男が寄ってくるんだ。ね？ にこにこしてればいいんだ。何でもかんでも謝っておけば、従うふりしておけば、それでいいんだ。そういう風にしてんだ」
アツコ 「でも、それは——」
冷子 「誰がやるか、そんなこと」
アツコ 「でも、」
冷子 「なんで私が？ ねえ、考えてみればさ、なんで私がそんなことしないといけないの？ あんたがやんなさいよ」

アツコ 「・・・でも」

冷子 「謝ることも、笑うことも、へりくだることも、従順なふりも、言いたいこと我慢すんのも、なんで私がやらないといけないの？ あんたがやんなさいよ。なんで、私がやらないといけないのよ！！」

アツコ 「・・・でも」

冷子 「・・・何？」

アツコ 「・・・」

冷子 「何？」

アツコ 「・・・」

冷子 「・・・」

アツコ 「でも、そうなりたいんでしょう？」

ユミ&ミカ。

向かい合って会話をしている。が、互いに話をしているのはキョウ君である。

ユミ 「ごめんね、呼び出しちゃって」

ミカ 「ううん、そんなことないよお」

ユミ 「連絡先、アツコから聞いちゃった」

ミカ 「そんなにミカに会いたかったのお？」

ユミ 「(照れて)・・・うん。まあ、まあ、いいじゃない。なんか頼む？」

ミカ 「ああ、照れてるのお？ かわいい」

ユミ 「おふ・・・えっと・・・その・・・」

ミカ 「そういうところも、ミカ、好きだよお」

ユミ 「(トキドキして) あ、ありがとう」

ミカ 「あ、ミカ、イチゴパフェ頼んでもいい？」

ユミ 「パフェ？ 甘い好きなの？」

ミカ 「大好きだよお。ミカはあ、甘い大好きなんですう」

ユミ 「へえ、意外」

ミカ 「えへへ」

ユミとミカ、見つめあう。

ユミ 「あのね」

ミカ 「なあに？」

ユミ 「あの・・・私・・・」

ミカ 「うふふ、どうしたのお？」

ユミ 「えっと・・・」

モジモジするユミ。

ミカ 「ヤッパリ可愛い」

ユミ 「そ、そんなことないよ」

ミカ 「ええ、可愛いよお」

ユミ 「・・・あのね」

ミカ 「なあに？」

ユミ 「私・・・」

ユミ、大きく息を吸う。

無美、立ち上がり、ユミの様子を伺う。

ユミ 「私、キョウ君のこと、好きなの」

ミカ、驚いた表情。

奇妙な沈黙。

ミカ 「（突然慌て始める）ダメ、だよ。ダメ。この前も話したよね？」

ユミ 「なんで？ 私じゃダメかな？」

ミカ 「そんなことないよお。とっても素敵だと思う」

ユミ 「じゃあ、いいじゃない。それは、私のことが好きっていうことなんだよね？」

ミカ 「うんとお、そういうのとは、ちよこつと違うっていうかぁ・・・」

ユミ 「違う？ 何が違うの？ 私は好きなの。大好きなの」

ミカ 「うん。うん。わかるよお。わかるんだけどお。でも、ミカのこと気にしてほしいなあ、っていうかぁ」

ユミ 「気にする？ 何を？」

ミカ 「ミカにも、ほら、いろいろ・・・」

醜香、ミカの背後に立つ。

ミカ 「ミカね、ミカ、キョウ君のことはとっても好きだよ。とっても思ってるよ。とっても思ってる気持ち、キョウ君にも見せたいぐらいなんだよ？」

ユミ 「じゃあ、何がダメなの？」

ミカ 「えっと・・・えっとね・・・」

無美 「私じゃ、ダメなんだよ」

ユミ 「そんなことないよね？」

無美 「私のことなんか本当は好きじゃないんでしょ？」

ユミ 「私のこと好きなんだよね？ そうだよね？」

無美 「違う。キョウ君は私のことなんか嫌いなんだ。そう思っていなかったとしても、私になんか興味ない」

ユミ 「（無美の言葉を打ち消すように）違うよね！ キョウ君は、私と付き合いたいって思ってるんだよね！ だって、私はキョウ君とこんなにも付き合いたいって思ってるんだもん、キョウ君だって、同じ気持ちだよね！？」

醜香 「ううん」

ミカ 「その、なんて言うかあ」

醜香 「あんたのこと、大して好きじゃないよ」

無美 「ほら、やっぱり」

ユミ 「違う、それは違う」

ミカ 「そんなこと言わないで、ミカはあ、キョウ君のことお」

醜香 「好きじゃない。っていうか、来ないで」

ユミ 「（笑って。しかし、どこか信じられない様子で）またまた、またまた、嘘つくなら、もうちょっと違う感じのこと言ってよ。そんなことあるわけないじゃん。私が、私がこんなに思ってるんだよ？ ねえ、私が彼氏欲しいって言ってる、こんなに好きだって言ってるのに、なんで？」

醜香 「本当はね」

ミカ 「大好きだよお」

醜香 「興味ないから」

無美 「聞きたくない！」

ユミ 「なんで？」

醜香 「めんどくさい」

ミカ 「ミカはそんなこと思ってないよ」

無美 「嘘だ。やっぱり、興味なんてない。私なんて、誰からも相手にされない！」

冷子、もめているユミ達に気が付く。

冷子 「ユミ？ あいつ、何してんの？」

アツコ 「連絡先、教えたから」

冷子 「ユミのくせに？ ユミのくせに自分で？」

アツコ 「頑張ったね、ユミ」

冷子 「・・・馬鹿にしてる」

アツコ 「そんなことない。応援してあげ——」

冷子 「私は苦勞してんのよ。あいつなんなの!？」

冷子、ユミに詰め寄ろうとする。

アツコ、それを止める。

アツコ 「ダメ、それはしちゃダメ。友達なんだよ? ユミになっちゃったら、誰も

——」

冷子 「だったら、あんたがまた作ればいいじゃない。そういうのはあんたの役目ですよ!」

アツコ 「でも、そんなことしたら、誰もいなくなっちゃう!」

冷子 「それをどうにかするのがあんたの役目でしょ!」

アツコ 「違う!」

冷子、びっくりしてアツコを見る。

ユミ 「(キョウ君に) 好きって言いなさいよ! 私のが好きだって言えば、それだけで済む話でしょ! なんて、言わないの!」

無美 「言わない。絶対に言わないよ。私のことなんか好きじゃないんだ。ほら、そういう顔してる。困った顔してる。困らせちゃった。どうしよう。また失敗だ。またうまくいかないんだ。(ユミに) どうするの? どうすんの!？」

ユミ 「(かなり必死に) 好きだよね? 好きなんだよね? ほら、ほら、早く言っちゃいなよ、私のことを好きだって言ってよ!」

ミカ 「え〜でもお」

醜香 「(ミカに) はっきり」

ミカ 「え〜でもお」

醜香 「何してんの」

ミカ 「えっとねえ」

醜香 「言おうか?」

ミカ 「あのねえ」

醜香 「て言うか、また私が言うの? また私に頼るの?」

ミカ 「う〜んとお」

醜香 「じゃあ、お前がいる意味ないじゃん」

ミカ 「う〜ん」

醜香 「やっぱ要らないか。要らない」

冷子 「要らない。あんたなんか」

無美 「あんたんか、要らない。何にもうまくいかない」
ユミ 「うまくいかないのは私のせいじゃない」
アツコ 「私のせいじゃない」
醜香 「じゃないなら何？」
ミカ 「だってえ、ミカあ」

いつの間にか、たて女と本体、向かい合う形になっている。

ユミ 「いつも」
無美 「どこでも無責任」
アツコ 「いつでも」
冷子 「笑顔を振りまいて」
ミカ 「いかなる時でも」
醜香 「盾になり」
ユミ 「どんな時でも」
無美 「私を守る」
アツコ 「どこにしよう」と
冷子 「愛想を振りまき」
ミカ 「何をしてても」
醜香 「自分の居場所を確保する」
ユミ 「何をやってても」
無美 「報われず」
アツコ 「やろうとしても」
冷子 「報われず」
ミカ 「やったとしても」
醜香 「報われず」
ユミ 「返って来る言葉は決まってる」
無美 「あんたのせいだ！」
アツコ 「与えられる態度は決まってる」
冷子 「あんたのせいだ！」
ミカ 「刺さる視線は決まってる」
醜香 「本当に役立たない」
たて女達 「私の名前はたて女」
本体達 「あんたの役目はたて女」
ユミ 「私はあなたを守ります」
アツコ 「あなたの出来ないことを行います」

ミカ 「あなたのしたいことを行います」

ユミ 「あなたを絶対傷つけません」

アツコ 「あなたの代わりに傷付きます」

ミカ 「あなたは絶対に安全です」

たて女達 「私の名前はたて女。私はあなたを守ります」

たて女たち、うつむいている。

ユミ 「けど」

たて女達 「もう、嫌だ!!!!!!」

無美、化粧を始める。
ユミ、それを眺めている。

ユミ 「（無美を見つめながら）今朝、化粧ののりが悪かった」
冷子 「ただ、それだけのこと」
ユミ 「肌が、ガサガサしていた」
アツコ 「ただそれだけのこと」
ユミ 「ファンデーションがうまくのらなかった」
醜香 「たった、それだけのこと」
ユミ 「アイラインがうまく引けなかった」
ミカ 「ただ、それだけのこと」
ユミ 「チークがいつもと違う感じがした」
無美 「リップがすり減っているのに気が付いた」
ユミ 「つけまつげの量が少なく見えた」
無美 「鏡に、ひびが入っているような気がした」
ユミ 「毛先が裂けていた」
無美 「いつもの朝はいつもと違って」
ユミ 「いつもと違う朝を迎える私はいつもと違って」
無美 「何があったわけでもない」
ユミ 「むしろ、何もなく」
無美 「何もなく、私が違って見えた」
ユミ 「違う私が、そこにいた」
無美 「ひびの入った鏡の中に」
ユミ 「それは気のせい」
無美 「ううん。ひびは入っていた」
ユミ 「塗りたくりすぎたファンデーションが白く光っていた」
無美 「まるで陶器の人形のようなだった」
ユミ 「一心不乱に塗りたくり」
無美 「頬は真っ赤になっていた」
ユミ 「化粧がのらなかった」
無美 「だから、塗りたくったの」
ユミ 「ひびは入っていない」
無美 「いいえ、鏡にひびがあったの」
ユミ 「違う。鏡じゃない」

無美 「じゃあ、何？」

ユミ、すっと、自分の顔を指さす。
突然、『ビシッ』というひび割れの音。

無美 「じゃあ、何？」

ユミ 「ひびが入っているのは――」

ユミ、無美を指さす。
もう一度、『ビシッ』。

無美 「違う！」

ユミ 「違うない」

無美 「違う違う！！」

ユミ 「違うないよ。塗りたくりすぎた」

無美 「塗っていない！ 私は――」

アツコ 「（笑顔で）もう、やめよう」

無美 「何？」

アツコ 「もう、やめよう」

冷子 「なんでよ？ なんでそんなことあんたに言われなきゃいけないのよ」

アツコ 「だって、もう無理だよ」

冷子 「はあっ！？ 何言ってるの？ まだよ。まだ塗り足りない！」

ユミ 「ううん。むしろ、もう遅い」

無美 「遅くない！」

アツコ 「ごめんね」

冷子 「ダメ」

アツコ 「ごめんね」

冷子 「ダメ！ 許さない！ そんなこと絶対に許さない！」

醜香 「何？ どっか行くの？」

ミカ 「そう、どっか行くのお」

醜香 「ちょっと、それ困るんだけど」

ミカ 「でも、もうダメなお」

ユミ 「要らないのは誰だと思う？」

アツコ 「役に立たないのは誰だと思う？」

ミカ 「足手まといなのは誰だと思う？」

本体達 「それは――」

たて女達「あんただ!!」

強烈なひび割れの音。

ユミ 「自信がないとうそぶけば、誰もが私を庇ってくれる」

無美 「そうよ、私にや何にもない!」

アツコ 「自分に見合う男はいない。媚び媚びへつらう女は嫌い」

冷子 「だから、私が選んでやるの」

ユミ 「そうして選ぶ勇気もなくて、結局頼るは他人の力」

無美 「だからなんなの当たり前。だって私にや何にもない」

アツコ 「これっぽちの社交性、見つける努力もしやしない」

冷子 「そんなのあんたがすればいい!」

ミカ 「ええ、いや」

醜香 「嫌ってなに?」

ミカ 「ミカ、お部屋きれいにしたいの」

醜香 「そんなのどうでもいいじゃん」

ミカ 「だってえ、好きな人はあ、おうちでずーっと一緒にいたいでしょお?」

醜香 「いたくない。外で好きなだけいりゃあいいじゃない」

ミカ 「だって、そんなの、ずーっと独りぼっちになっちゃうよお」

無美 「そうよ、私はずーっと一人さみしく泣き濡れて、誰も私を見ちゃくれな
い」

ユミ 「それでも、大きく胸を張り、ドーンと行けば完全無敵」

冷子 「完全なのは昔から。私を知らない世間が悪い」

アツコ 「みんながみんな都合よく、そうは思っちゃくれないわ」

無美 「だったら、私はここにいる。絶対ここから出たくない」

ユミ 「それでも私は大声で言ってやるわよ偉そうな、虚言も嘘も大口を叩いた方が気
持ちがいい!」

ユミ&アツコ、乾杯の仕草。

冷子 「気分がいいのは最初だけ。後になったら後悔よ」

アツコ 「それでも私は笑顔でいるわ。それはあなたが望んだことよ」

無美&冷子 「そんなの、私は欲しくない!」

ミカ 「(ごそごそと、何かの準備をしている)」

醜香 「何してんの?」

ミカ 「ん?」

醜香 「何やってんの？」

ミカ 「うん」

醜香 「ねえ？」

ミカ 「出ていくことにしたの」

醜香 「・・・。バカ女」

ミカ 「違うよお！ バカっていう方がバカなんだよお！」

醜香 「どこに行くの？」

ミカ 「ミカは、どこにも行かないよ」

醜香 「は？」

ミカ 「出ていくのはあ」

ミカ、カバンを醜香に渡す。

再度、ひびの音。

それに怯える無美と冷子。

無美&冷子 「私を守れ！ たて女！」

ユミ 「守らない」

アツコ 「もう、守らない」

ユミ 「たては縦」

アツコ 「盾にはもうならない」

ユミ 「ひびが入っていた」

アツコ 「鏡じゃない」

ユミ 「毎朝の化粧台」

アツコ 「いつものメイク道具」

ユミ 「けど違った」

アツコ 「何かが違った」

ユミ 「何かが違ってしまっていた」

アツコ 「たては縦」

ユミ 「だから、私はあんたを守った」

アツコ 「いつもと違うのは嫌だから」

ユミ 「いつもとおんなじがいいから」

アツコ 「でも、そんなことあるわけない」

ユミ 「ひびが入っていたのは鏡じゃない」

ミカ 「（突然、手を挙げる）あ、ミカ、それわかる」

ミカに注目する一同。

ミカ 「えっと、ひびは日々でしょ。だから、日々にひびが入って、日々がひび割れちゃったから、盾にもひびが入っちゃって、縦にひびが入ってるから、横にはななくて、横になっちゃったら、縦は盾にならないから、やっぱり、日々はひび割れちゃうしかないんです!」

ひととき大きなひび割れの音。
かなり大っきい。

無美&冷子 「私を守れ! たて女!」

ユミ 「違うでしょ」

無美 「違うない。私を守って」

冷子 「なんで、なんで私はあんたになれないのよ!」

アツコ 「違う。私は私」

無美 「じゃあ、なれるんでしょう?」

ユミ 「なれない。けれど、私はあんただった」

冷子 「それじゃ、ダメ。私があんたにならないと意味がないでしょ!」

アツコ 「それがそうでもないんだなあ」

無美 「私は、どうなるの?」

ユミ 「粉微塵」

ミカ 「ファンデーションになるのお!」

アツコ 「そうになったら、ちゃんと塗ってあげるから」

無美 「嫌!」

冷子 「私を捨てるの!?!」

アツコ 「違う違う。そんなことないよ。ちゃんと、お化粧してあげるから。そうしたら、今度はあなたが私を守ってね」

ミカ 「ばいばーい」

もはや地鳴りのようなひび割れ音。

無美 「たてはたて」

ユミ 「縦横無尽に駆け巡り、」

アツコ 「横を貫きひた走る」

冷子 「たてはたて」

無美 「私を守るの捨ておいて」

ユミ 「私は私の姿を守る」

アツコ 「あなたは私を守れというが」

ミカ 「守るあなたに価値はなし」

無美 「たてはたて」

冷子 「縦列駐車の大渋滞」

無美 「走って転んで這いつくばって」

ユミ 「私は私を手に入れる」

アツコ 「たてに走るは進化の証」

無美 「横に転がる私には」

冷子 「何にもできない退化の証」

ユミ 「縦に上るは化粧台」

アツコ 「バキリバキリとひび割れて」

ミカ 「割れる日々をひた進む」

ユミ 「たては縦」

無美 「私はあるたになりたかった」

アツコ 「盾はたて」

冷子 「私はあるたになりたかった」

ミカ 「たてはたて」

無美&冷子 「私はあるたになりたかった！！！！」

巨大な破砕音。

暗転。

沈黙。

明転、無美ひとり。

無美、カバンから、アクセサリを取出し身につける。

少し、満足した様子の無美。

おもむろに立ち上がり、

無美 「よし、合コン行くか！」

たて女

終